

## 白忠鉉助教授のコメントへの応答

著者	片柳 榮一
雑誌名	聖学院大学総合研究所紀要
号	65
ページ	45-48
発行年	2019-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15052/00003616">http://doi.org/10.15052/00003616</a>

## 白忠鉉助教授のコメントへの応答

片柳 榮 一

拙論に丁寧で、真摯なコメントをしてくださった白助教授に深く感謝します。コメントを通して自らの考えを一層掘り下げる機会を与えられました。

教授がコンパクトにまとめてくださった五つの問いに答えるかたちで進めます。

1. 話の核心にある、コペルニクスの転換において見えてくる「人間的自由」を神の存在と結びつける点が説得力を欠くのではないかと問いますが、私は、人間の自由と神の存在を、直接結びつけようとはしなかつたし、まして自由が神の存在の証明になるとも考えてはいません。確かに、ドストエフスキーのイワンの問い、神が存在しないなら、全てが許されているのか、との問いに対して、私は、真の問題は、あらゆることを為すことが許されている時、お前は何を為そうとするかが問題になると語りました。少し表現が曖昧でしたが、全てが許されている時、ということが、文脈上、神が存在しない時に、ということと解釈できるので、ここで神の存在が問題になっていると解されるのですが、私の問題にしたいのは、神は何処で問題になるのかということとです。イワンにとっては、掟の指定者、そしてそれに従い報償と罰を与える者としての神でした。カントやボンヘファーはそのような機械仕掛けの神を否定し、神の問いを別

の場に移しました。白教授は、適切にも無神論という前提の上で、人間的自由を主張する人の例としてケーガン (Sh. Kegan) 教授を挙げられました。彼が、人間の自由を認めながらも、死が消滅であり、永遠の生命もないと主張しながら、人間はただ一度だけ自己に与えられた生に感謝して、生を慎重に生きるべきであり、そうできると述べていると言われました。私はあらためてフランクルのコペルニクス的転換の意味を思うのですが、それによれば、このケーガン教授が前にしている事態、死が個人の消滅であり、永遠の命などないということ、そのことが、彼に与えられている状況であり、これ自身が一つの「問い」になるのです。いや、ケーガン氏は、一つの答えを出したのです。まさに彼が、答えた故に、「ただ一度の生」が見えてきたのであり、それを感謝をもって受け取っているのです。この「ただ一度の生」ということが、私の話の隠れた、赤糸であり、基本的なテーマであったのです。ここでカフカもフランクルもボンヘファーも、同じ所に立っているように思います。ただ言葉が違い、ケーガン氏は、神なしの世界と言い、ボンヘファーは、この神なしの世界で神の前に立つと言うのです。私は、本当の宗教間対話が生まれるのは、この「ただ一度の生」がありありと開かれる場ではないかと思っています。ここでもう一度、「神」という言葉、「人間」、そして宗教という言葉でそれぞれが意味していることを再吟味する必要がある、できるのではないかと思います。

2. ここで問題にされた自由は、個人的、実存的次元における自由であり、自由の総体的実在を表そうとするなら、異なったアプローチも必要ではないかとの問いですが、確かにここで問題にされた自由が、その総体ではないと認めざるをえません。ことに社会の変革に関わる自由を指摘されましたが、私も、近代の民主主義の基礎に、宗教的な自由の觀念があつたとする、リンゼイ (A.D. Lindsay) の考えには深く影響を受けています。その意味でここで問題にした自由が総体ではないということは認めますが、しかし全体の中の部分だということではないと思います。ここで問題にした自由は、人間存在の「基礎」にあるものであり、人間存在の「微」であるということはおきたいと思っています。

3. フランクルの傍らで、コペルニクスの転回ができずに死んでいった多くの人の問題についてはどのように語りうるのかとの問いですが、その問いに対しては、我々は沈黙せざるをえないと思います。それはフランクルのこのコペルニクスの転回思想とは関わりなく、その無念の死に対しては沈黙せざるをえません。そのことを言った上で、私はこのフランクルを、限界状況を耐え抜いたヒーローと考えてここで問題にしたのではないことを言っておきたいと思いません。

確かに彼自身、かかる考えは我々を救うことのできる唯一の考えであったのであり、彼が「彼の考えを「限界的状況を如何に乗り越えるか」を教えるヒーロー的存在と捉えることもできるかもしれませんが、それでは少し核心からそれてしまう」と思います。確かに彼はこの考えによって、強制収容所を生きのびえたのですが、私は当時のフランクルを思い、次のように記しました。「おそらく誰から見捨てられ、忘れ去られて死んでゆく自分を覚悟していたであろう。しかし、今自分がしなければならないのは、この問いに答える、それだけでよいのだと彼はわかった」。その意味である収容所でくずおれ、倒れていった人と同じ所に立っていたと言わざるをえません。ただ深く領いて、あの不条理の現実を受けとめえたということが、違いだと思つています。我々はそれ以上は沈黙すべきであると思いません。

4. 人間的自由の総体的実在を問題とするのに、カフカはふざわしくないのであるかとの問いですが、私はここで、カフカを我々が模範とすべき人物として言及したわけではありません。確かに父との関係だけでなく、愛する人と二度婚約を破棄せざるをえないような困難を彼は自らの内に抱えていました。しかし彼は恐ろしいほどの鋭敏さで、生を見つめており、そこには深い宗教的なものを感じることができます。彼の書いたものを通して、我々の宗教的生への感受性

を磨くことは可能であると思います。

5. 最後の問いは、私にとって神は如何なる方なのかということですが、これが確かに最も困難な問いです。ペーパーにも記したことを繰り返して、私の口ごもりながらの返答とさせていただきます。「それは、口に言い表し難きものである。それでも言葉を発するとすれば、それは、それぞれに与えられた場を、自らがただ独りだけ問いかけられている究極の場として受けとめるよう呼びかけ、促し、励ます方であると言えよう。フランクが言うコペルニクスの転回の場合に立つ者を、深い肯定の慰めと喜びで満たす方である」。